

# ワールドカップ・キャンプ誘致とまちづくり —大分県中津江村の取り組み—

財団法人中津江地球財団理事長

元大分県中津江村長 坂本 休



## ●はじめに

えひめ国体の2017年度開催を心よりお喜び申し上げます。

国体は、国内最大のスポーツの祭典として、国民スポーツの振興とスポーツ文化の発展に貢献してきましたが、近年、開催県の独自性が発揮され、開催地のPRや地域の活性化につながる大会としての位置付けがなされています。一流のスポーツを通じて県民に感動を与え、全国から集まる選手・観客に思い出に残る国体となることはもちろん、愛媛の良さや魅力を全国へアピールし、また地域活性化につながる大会になることを心から期待いたします。

## ●中津江村のキャンプ誘致

さて、形は違いますが、私の住む大分県中津江村では、10年前の2002年日韓共催のサッカーワールドカップ（以下「ワールドカップ」という。）開催時に、出場国チームのキャンプ誘致に村を掲げて運動しました。ワールドカップ日本組織委員会が示した公認キャンプ地の条件は、「2面以上の良質な芝のグラウンド」「夜間照明施設」「屋内トレーニング施設」「選手・関係者を収容できる施設」「宿泊施設からバスで15分以内の距離」など21項目ありました。幸いにも村には最低限の条件を満たす施設や立地条件が整っておりました。

私は、村長として、村の振興と、そして現実的には、「鯛生スポーツセンター」の利用率を高めることを目的

に、キャンプ地として立候補いたしました。「鯛生スポーツセンター」は当時建設から8年を経過し、ちょうどリニューアルの時期でもありました。ワールドカップに出場する選手が使用したグラウンドでプレーができるということで、サッカー少年に夢とロマンを与え、また、試合や合宿で多くの方に中津江村に来てもらって村を活性化しようという思いで、村民全員でキャンプ誘致に取り組みました。

当時公認キャンプ地に名乗りをあげたのは全国で84箇所。その中で中津江村は一番小さい自治体で、公認キャンプ地の条件は満たしているものの、一番可能性が低いと思われていました。しかしながら、紆余曲折はあったものの、カメルーン共和国チーム（以下「カメルーンチーム」という。）が中津江村をキャンプ地に選びました。カメルーンチームが中津江村を選んだのは、自然環境に優れ、静かであることと、標高530mということなど事前キャンプのトレーニング地として好条件が揃っていることが、決め手になったということでした。

## ●カメルーンチームとの交流

カメルーンチームはシドニーオリンピックでの金メダルを弾みに、ワールドカップ優勝を目指し、「何もないからここに来たのだ」というカメルーンチームの監督の言葉のとおり、都会の便利さは無くともキャンプ効果が上がりそうな中津江村を選んでくれたのだと思いました。私はその熱意を推察して試合を通して村を挙げて応援し

ました。

また、記憶されている方もおられるかと思いますが、カメルーンチームの来日予定は何度も変更され、結局予定日の5日後の午前3時30分となりました。その時間にも関わらず、村の人口の約1割の130人の村民が出迎え、選手たちは笑顔で応えてくれました。そしてこの出迎えがカメルーンチームと村民の間に信頼関係を築き、キャンプを成功に導いたと思います。

キャンプの期間中は役場の職員は深夜や未明の勤務となりましたが、一人として遅刻者もなく、小学生と高齢者のボランティアによる共同作業は一体感と親睦の輪を育てました。壮行会では選手が飛び入りで子供たちが踊る花笠音頭に加わったり、サインにも気軽に応じたり、掃除をしているおばあちゃんと写真を撮ったりと、とても友好的に接していただきました。

また、予定が変わってもチームをひたむきに待ち続ける村民の姿や深夜の歓迎の様子、選手と村民の交流の様子は連日テレビで報道され、中津江村の名前は一躍「全



国区」となりました。

### ●カメルーンとの交流

移動の疲れもあったのか、残念ながらカメルーンチームは予選リーグで敗退しましたが、このキャンプをきっかけとして、カメルーン共和国との交流が始まりました。「道の駅鯛生金山」で食べることができる「カメルーン弁当」はカメルーン人の女性たちと協力して企画し、おかげ様で今も少しずつ改良を加えながら皆さんに親しまれています。使い古しのサッカーシューズをカメルーンの子供たちへ送っています。中津江村とカメルーン政府との交流といたしまして、カメルーン建国記念式典が東京で毎年開催されますので出席します。今年のカメルーンキャンプ10年記念祝賀会には駐日カメルーン大使が来席下さいました。私個人といたしましても2010年南アフリカワールドカップの際には、カメルーンチームの応援に日本対カメルーン戦に駆けつけるなどその他、多数の交流がおこなわれております。



### ●鯛生スポーツセンターの利用増加

また、キャンプ地となった「鯛生スポーツセンター」は知名度が上がり、サッカーのメッカとなりつつあります。芝のグラウンドが3面と砂地のグラウンドが2面、高校生430人が宿泊できる宿舎とB&G 海洋財団の体育館、プール。ワールドカップ後、芝のグラウンド1面を増設して計6面となっています。元々はラグビー場として整備し、「九州の菅平」を目指していましたが、1998年のフランスワールドカップ後、少年サッカーの利用が高まり、2002年のワールドカップ後はさらに利

用が増え、少年サッカーチームや高校生の合宿研修、又セミナー、塾の合宿などにも発展しました。主は高校生ですが、昨年の合宿利用者は39,000人に達しました。一方、ラグビーは、「全九州中学校ラグビー大会」2泊3日と「全九州ジュニアラグビー大会」2泊3日の2大会のみとなりましたが、この大会には保護者の応援が多く、村の人口とほぼ同じ人が九州一円から集まって来ます。



### ●キャンプ誘致とまちづくり

さて、カメルーンキャンプの最大の効果は、一連のマスメディアの報道も含めて、村民が「中津江村」の良さを再認識したことだと思います。村外・県外の村出身者からも、ふるさと中津江村の豊かな自然と優しい思いやり、もてなしの心に感動した、自分のふるさとに誇りを持ったとのお話をたくさん聞きました。

平成の大合併により、2005年3月、中津江村は前津江村、上津江村、大山町、天瀬町と合併し、日田市となりました。村民の「中津江村」に対する思いは、合併後も「中津江村」という名前を残し、現在、私たちの村は「大分県日田市中津江村」となっています。また、合併後、何も無い村になっては空しい。耕して、種子を蒔き、物を育てる喜びと幸せを感じたい。またこれまで一緒に村を作ってきた村民の絆を守ろうと、村内の500世帯が出資し、財団法人中津江村地球財団を設立しました。

この財団では、「鯛生スポーツセンター」の管理運営の他、昭和47年に閉山した鯛生金山を昭和58年に「地底博物館鯛生金山」として整備した博物館や「道の駅鯛生金山」「家族旅行村」の運営等を行っています。合宿

施設の鯛生スポーツセンターの利用が増えることで、「鯛生金山」「家族旅行村」への入場者も増え、レストラン・売店の売り上げも増加しています。また、1992年に地元農産物を加工・販売する施設として、中津江村他2村とJAが共同出資して作った「株式会社つえエーピー」でも、カメルーンキャンプを契機として販売額を伸ばし、地域の雇用確保と活性化に貢献しています。

### ●おわりに

キャンプはわずかの間でしたが、住民が温かい気持ちでカメルーンチームを迎えたことで、カメルーンチームとの間に信頼関係が生まれ、一方、地域の側にも、改めて一体感と地域を「誇り」に思う気持ちが生まれました。これが、いろいろな方向に発展して、小さな村に大きな花が咲きました。小さな村の取り組みではありますが、住民が一体となって取組むことのすばらしさを実感しています。



### Profile 坂本 休 (さかもと やすむ)

平成 8年 6月 中津江村長初当選 (3期)  
平成16年12月 財団法人中津江村地球財団理事長  
サッカー J2大分トリニータ後援会名誉会長